

千葉市に生きる

夢 思いやり チャレンジ



千葉市中央図書館



千葉市立海浜病院



学校による国際交流会



千葉市国際交流協会主催の交流会



新港学校給食センター

千葉市教育委員会

はじめに

千葉市では、「夢と思いやりの心を持ち、チャレンジする子ども」を育てることを目標に、いろいろなことに取り組んでいます。

この資料には、皆さんの生活を支えてくださっている学校給食センターや千葉市中央図書館、千葉市立海浜病院、そして世界との接点である千葉市の姉妹・友好都市が登場します。

ぜひ皆さんには、道徳の時間の中で、資料に登場する人物の立場や気持ちになり、友達の考えを聞いたり自分の意見を述べ合ったりする中で、これまでの自分を振り返り、これからの自分の生き方・在り方を見つめていってほしいと願っています。

また、さらに夢を持ち、思いやりの心や目標に向かってチャレンジする気持ち、心の中に育まれていくことを願っています。

指導課長 山本 幸人

目次

1	和夫の献立	1
2	読書への招待状	5
3	私の生まれた日	9
4	私の知らない世界	13

和夫の献立

幼い頃から料理が好きだった和夫は、時々、母の料理の手伝いをしたり、一人で簡単な食事を作ったりしていた。家庭科で学習した栄養素を考えた献立が、家族にとっても好評だったので、週に一度は食事作りをすると決めた。しかし、部活動で帰りが遅くなったり、テスト勉強を言い訳にしたりして、次第に作らなくなっていくた。

そんな中、楽しみにしていた職場体験の時期を迎え、学校では希望する職種を選ぶアンケートが実施された。友達の中には、将来を考えて、体験先を選ぶ者もいたが、和夫は、将来何になりたいのか、まだはっきりしていなかった。ただ料理が好きなので、学校給食センターを選ぶことにした。

職場体験の初日、センターでは、多くの職員のみなさんが手際よく働いていた。献立を考える人、食材を運ぶ人、調理をする人など、各工程ごとに担当が決まっているとのことだった。

調理場に入って一番驚いたのが、最新の設備だ。近くで見ると、巨大な蒸気回転釜やフライヤーが何台も並び、多くの調理員さんが大量の食材を調理していた。食材の下処理、調理、学校への配送にいたるまで、徹底的な衛生管理がされていて、まさに学校給食の心臓部といえる場所だった。



午前中の見学後、和夫は職場体験の課題である献立作り早速取り組んだ。その献立が、職場体験メニューとして、千葉市中の学校に紹介されるのだ。千葉市内の多くの学校で食べられるかと思うとわくわくした。和夫は、喜んで食べてもらうために、みんなが好きなものを多く取り入れた献立を考えることにした。

（まず、みんなが好きなハンバーグ。でも、肉を使わないで、豆腐とひじきを使ってみよう。野菜は残す人が多いから、クリームシチューの中に入れてよう。主食は、きな粉揚げパンだ。デザートは、フルーツポンチにしよう。きっとみんな喜ぶぞ。）

しかし、その献立を見た栄養士の佐竹さんは、パソコンに和夫の立てたメニューを打ち込み、その栄養素などの結果を見せながら、説明を始めた。

「見てごらんさい。エネルギーが多いし、脂質も取り過ぎていゝわね。私はいつも中学生の健康な体づくりや健全な食生活を考えて、栄養のバランスのとれた献立を作っています。食事は、みなさんの命を支えているんですよ。」

それから佐竹さんのアドバイスを受けながら、栄養、食材、季節、地産地消、好みなどを考え、何度も何度も献立を作り直した。そして、やっと五回目で献立が認められた。栄養のバランスやエネルギーを考えるのは、思ったより大変だった。

（佐竹さんは、いろいろ考えていて、すごいな。）

翌日、和夫が調理場に入った時には、すでに佐竹さんは、食材の確認を終えていた。ここで作られる給食は、約一万食。

（いよいよ給食作りが始まる。うまくできるかなあ。）

《給食センターの1日の流れ》

5:30	調理員出勤
7:00	※栄養士出勤
7:30~8:00	※食材の検収（確認）
8:00~10:30	調理 ※確認・味見
10:30~	運搬
14:30~	※残量チェック 食器等の洗浄 （※は、栄養士の仕事）

佐竹さんは、一つ一つの作業を全て把握し、料理が出来上がると、味の確認をする。食材からでる水分などによって、それぞれの釜ごとに味が微妙に変わることがあるという。全てを同じ味に調整するのは、栄養士の最大の仕事で、腕の見せ所だ。

午後からは、回収されてきた残菜量を食缶のバーコードで計測する。その結果を自分の献立に対する評価として受け止め、次の献立作りに生かしていく。

職場体験の最終日、これまでの活動の振り返りをした後、三日間お世話になった佐竹さんにお礼をする時に、和夫はずっと聞きたいと思っていたことを質問した。

「なぜ、栄養士さんになったのですか。」

「小学生の頃から、料理をするのが好きで、おやつを自分で作っていたのよ。母の手伝いもよくしたわ。高校生になったら、母の代わりに夕食を作ることもあったわ。料理をするのが好きだったから、卒業したら栄養士になろうと思って進学したのよ。」

「じゃ、佐竹さんは夢が叶ったんですね。」

「思い通り栄養士にはなれたけど、最初の職場は病院で、朝早くから働かなければならなかったし、食事の種類も多くて大変だったの。今の仕事に就いてからもね、一万食でしょ。しかも献立のAコースとBコースの組み合わせを考えるのは大変だし、食材の発注ミスも許されないのよ。毎日が時間との戦いだわ。辞めたいと思ったことも……。でも

ね、給食の残菜量が少ないと、おいしく食べてくれたんだなあとうれしくなるし、時には、試食会に参加した保護者の方から、おいしかったのでそのレシピを教えてほしいと言われることもあるのよ。やっぱり、わたしは食に興味があって、この仕事が好きなんだと思うわ。だから、がんばれるのかしら。」

職場体験から数か月後、和夫が立てた献立の日がきた。何度も直したので、肉や野菜のバランスのよい献立ができた。

《〇〇中学校職場体験献立》
野菜たっぷりチキンカレー、オムレツ、野菜のドレッシング和え、ヨーグルト、牛乳

「野菜がたくさん入っていて、健康によさそうだね。」

「みんなが好きなメニューだし、すごくおいしい。」

食べ始めると、クラスメイトたちの感想が聞こえてきた。和夫は、なんだかうれしい気持ちになり、佐竹さんの言葉を思い出していた。

（好きだから、がんばれる…。）

職場体験後、できなくなっていた食事作りを再開しようと思った和夫は、家に帰ると、明るい声で家族に言った。

「土曜日の夕飯は、これから僕が作るよ。栄養のバランスも考えてね。」

☆なぜ、和夫は食事作りを再開しようという気持ちになったのでしょうか。

☆目標を実現するためには、これからどんなことに取り組みばよいのでしょうか。

読書への招待状

私は本が大好きだ。幼い頃は、おばあちゃんがよく絵本を読んでくれた。今では月に十冊以上の本を読む。そんな私は図書委員になり、新任の学校図書館指導員である田中先生や他の委員と一緒に、カウンター当番をしたり、図書便りや掲示物を作ったりしている。本を通して人と関わるのも楽しい。

図書委員会の活動の一つとして、学期に二回、近くの子どもルームに読み聞かせに行くことになった。子どもルームには、小学一年生から三年生まで、五十人くらいの子どもたちがいる。

(どうしよう?ちゃんと聞いてくれるかな?)

学年もばらばらで、たくさんの小学生に、初めて読み聞かせをするので、どんなものかわからず、楽しみよりも不安の方が大きかった。田中先生と委員たちで相談して本を選び、読む練習をして本番に臨んだ。

読み聞かせ当日、たくさんの小学生を目の前にして緊張のあまり、私たちは何度もつかえてしまった。そればかりか、前を向いて読むこともできなかつた。始めはみんなじっとしていたが、途中から飽きてしまったのか、遊び出したり、話し始めたりと、ざわついてしまった。そして、一人の男の子の一言が響いた。

「なくんだ、全然おもしろくないの!」

私は、一生懸命準備したのにうまくいかなかったことで、小学生に読み聞かせをする難しさを改めて感じた。委員たちもみんな、どうしたら喜んでもらえるのかと落ち込んでいた。私は、おばあちゃんが私にしてくれたように、本の楽しさを小学生にも感じてもらいたいと思い、委員のみんなを励まして、解決策を考えたが、途方に暮れる日々が続いた。

「どうしたの？」

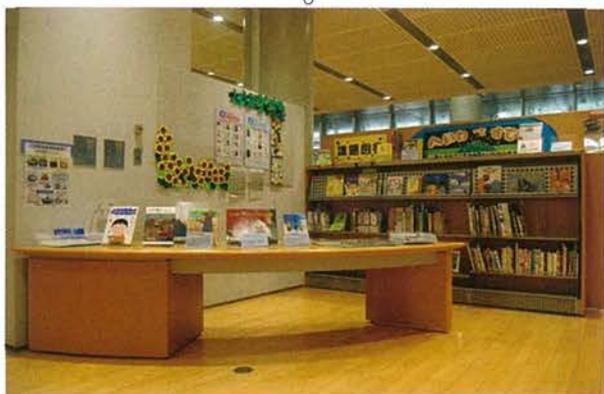
いつもと違う様子の私に気づいて、田中先生が声をかけてくれた。言おうか言うまいか迷ったが、思い切って話してみた。先生は真剣に聞いてくれ、しばらく考えてから、口を開いた。

「中央図書館に、私の先輩の司書さんがいるから、一緒に行って、いろいろ教えてもらおうか。」

その申し出に、何かにすがりたい気持ちでいっぱいだった私はすぐに応じた。

「ぜひ、お願いします！」

休みの日に、田中先生と一緒に千葉市中央図書館へ行ってみた。図書館の一階には、児童フロアがあり、たくさんの本や紙芝居が並んでいて、見ているだけでも楽しくなる雰囲気だった。表紙を見て選べるような本棚があり、読み聞かせにふさわしいものが見つけられそうな感じがする。二階にあるレファレンスカウンター



へ行くと、田中先生の先輩である石井さんが時間をかけて、親身に、本の選び方や読み方の工夫、本の世界に浸る雰囲気作りなどの相談に乗ってくれた。

「緊張してしまって、気づかないうちにどんどん早口になってしまったんじゃないかしら。言葉の少ないページも、ゆっくり絵を見る余裕を持つといいわ。読んであげるという感じではなく、一緒にその時間を楽しむことが大切なの。小さい子にしてみたら、大冒険に出かけるのと同じくらいの大きな体験よ。そんなすてきなことができるなんて、あなたにとっても、いい経験になるわね。」

石井さんの説明はわかりやすく、すぐやってみようと思うことばかりだった。

「ありがとうございます。」

私は、自分がおばあちゃんに本を読んでもらった時のことを思い出した。

(もう一度がんばってみよう。)

月曜日から田中先生と一緒に、全員が一丸となって読み聞かせの準備を始めた。忙しい中、時間を見つけて、読む練習を何度もした。委員同士で互いに聞き合い、意見を出し合った。石井さんからのアドバイスを忘れかけていることを田中先生が教えて励ましてくれた。前回よりも念入りに準備した。

(きっと次はうまくいく。)

一ヶ月が経ち、二回目の読み聞かせとなった。石井さんの言うとおり、読み始める前に表紙をしっかりと見せて、雰囲気を盛り上げた。集中してお話を聞いているか、小学生の様子を見ながらゆっくり進めた。中学二年生の読み手と小学生の聞き手が、

じっくりと本の世界を楽しんでいた。自分も小学生も話に引き込まれていた。
「ああ、おもしろかった！」

その一言が、今まで静かだった雰囲気を破った。みんな一斉に読み聞かせをしたお話について感想を話し始め、誰もが笑顔いっぱいになった。そんな様子を見た私もうれしくなり、委員も田中先生もみんな笑顔になった。子どもルームの子どもたちにもさうならを言って帰ろうとした時に、前回全然おもしろくないと言った男の子が近くにやってきました。

「お姉さん、ありがとうございます。次はいつ来てくれるの？」
私は思わず、田中先生と顔を見合わせた。

早速、今日のことを報告したくて、田中先生と一緒に石井さんのいる中央図書館に向かった。石井さんは、私たちの成功をとても喜んでくれた。

「私はたいしたこととしてないわ。田中先生のおかげね。」

そう言って、見送ってくれた。帰り道、私は改めて田中先生の方に向き直り、
「田中先生、ありがとうございます。」

と言って礼をした瞬間、これまでの出来事が走馬燈そうまとうのように駆け巡った。

☆私の「ありがとうございます。」という言葉に、どんな気持ちで込められているでしょうか。

☆あなたの伝えたい「ありがとうございます」は何でしょうか。

私の生まれた日

対 識 知
に 知 識
者 者 者
護 護 護
保 保 保
や 性 性
も 性 性
ど や と
子 子 子
の 尊 尊
期 の 尊
春 命 と
思 生 と
、 。 る
は す ず
室 ま 解
教 理 の
期 わ く
春 行 し
思 て 正
し を 思
識 を 識

助産師さんが、画用紙に針で一つ穴をあけた。あいたのは、見えるか見えないかの点だった。

「この小さな点が生命の始まりです。精子と卵子が結びついた時の大きさ、この小さな点くらい大きさです。ここにいる私たちの体はこの小さな点から始まり、母親の胎内で育つのです。皆さんも私も、ここにいることは奇跡のようなことだと思いませんか。」

思春期教室で、私たちは妊婦ジャケットを着て、妊婦の大変さを実感した。また、赤ちゃん人形を抱き、おむつ替えの仕方を学んだ。そして、助産師さんから命の尊さや出産について伺った。

最近、何気ない母の言葉にいらだててしまう私だが、助産師さんのお話があったからだろうか、母と話をしたい気持ちになった。

「今日、助産師さんの話を聞いたの。私たちがこの場にいることは、奇跡なんだって。」

母がテレビの画面を消した。これは、母がきちんと話をしたい時の合図だ。



小療症、医たで、地域れ院地さ。病院紹介す。支援紹す。支まら。療りか。医あ関。域が機。地科療を、5医療。は1の診院の域の病等地ん浜科、さ海児は者立生で患市新院重葉や病重千科支児支状

「そろそろあなたにも、ちゃんと話をしたほうがいいわね。実はね、あなたも、今の医療がなければ生まれてこなかったかもしれないのよ。」

「えっ。どういうこと。」

突然の話に、私は驚いた。

「あなたが生まれる前から、お母さんの子宮には筋腫きんしゅという塊かたまりがあったの。こぶしくらいの大きさだったそうよ。その塊があるために、お腹の中で赤ちゃんが育ちにくい環境だったらしいわ。もし、無事に育っても、出産するときにその塊に邪魔されて、赤ちゃんは出てこられない。だから、あなたはお腹から出たくても出られず、私もあなたを産むことができず、二人とも死んでいたかもしれないのよ。」

「じゃあ、私は、どうやって生まれたの？」

「帝王切開ていおうせいかいという手術で生まれたのよ。近所の病院であなたの妊娠がわかった時、先生に危険を伴う妊娠、出産だと言われたわ。ようやく授かった命だから、大切にしない、ともね。そして、設備の整った千葉市立海浜病院を紹介されたの。それから、海浜病院でお腹の中のあなたの育ち具合を診ながら、手術の日が決まっていたの。」

「へえ、そうだったんだ。お母さんは、怖くなかった？」

「怖いというより驚いた。なぜって手術の予定日の二日前に検診したら、お腹にいるあなたの心臓の音が聴こえなかったの。産科の先生たちが何人も集まってきて、緊急手術することになったのよ。お父さんの職場にもす

ぐに来るように電話が入ったらしいわ。」

「私にもそんなことがあったの。」

「慌ただしくて、心の準備もできなかつたわ。下半身麻酔ますいをされて手術室に行くのと、産科の先生が二人と、助産師さん、看護師さんもいたわ。あと、もう一人見たことのない先生らしき人もいたの。」

「十四年も前のことでしょ。よく、覚えているね。」

「子どもを産むって大変なことよ。普通分べんの人でも、一日以上陣痛の痛みに耐える人もいるの。ところが、手術は早かつたわ。三分間であなたの産声が聞こえたの。」

「私、大丈夫だったの？」

「ええ、元気な女の子ですよって、看護師さんが言ってくれたわ。息を切らして駆けつけたお父さんも、泣きながら先生方に何度も何度もお礼を言っていたわ。」

「よかつた。」

「そして、『僕は必要ないみたいだね。良かったよ。』と言って一人の先生が帰って行ったの。後で聞いたら、その人は新生児科の先生で、もしあなたの心臓が止まっていたら、すぐに対応するためについてくれたの。」

「私が生まれるのを多くの人が助けてくれたのね。」

「そう。とても恵まれていたと思うわ。病院の人、家族、たくさんの人たちがあなただの生まれるのを助けてくれた。」

「手術の後、私は、大丈夫だったの？」

「あなたはとても元気だった。ミルクをいっぱい飲む赤ちゃんだった。しばらくの間、心臓のことは心配されていたけど、順調だった。でも同じ病室だった人は、家について突然に陣痛が来て、救急車で運ばれ、病院の場所もわからなままここで出産したそうよ。その人の赤ちゃんは、まだ六か月という早産で生まれたの。保育器に入っていて、お母さんが赤ちゃんを抱ける日は、まだ数か月も先と言われていた。そして先生に、これから命にかかわる何かが起こるかもしれないとも言われていた。」

「そうなんだ：。」

「誰もが元気で生まれてこられるわけじゃないのよ。お母さんね、あなたを産んだ時に思ったの。もしも、あなたの心臓の音が聞こえなかったら、どんなにつらかっただろうって。」

母の目に涙が光っていた。久しぶりに母ときちんと話をした気がした。



☆母の目に涙が光っていたのは、どうしてでしょうか。
☆自分が生まれて今ここにいることを、どう思いますか。

私の知らない世界

私の世界の国々への思いが変わったのは、叔母おばの深いため息からだった。

叔母は、ツアーコンダクターとして世界中を飛び回り、旅を終えると、各国の観光地の様子や景色、文化などについて話してくれる。私の部屋には、今まで叔母からもらったお土産や写真が飾ってある。日本とは違う異国の街並みの美しさ、抜けるような青空にそびえ立つ迫力ある山々のポストカード。そして、笑顔の子どもたちの写真……。いつか私も世界の国々の素晴らしさを見てみたいという憧れを抱いていた。

私の周りには、「世界の国々」があふれている。学校には、語学研修のパンフレットが置かれ、ポスターが掲示されている。十一月には、毎年、世界で唯一の男女混合レースの国際千葉駅伝が行われ、たくさんの市民が選手を応援している。社会科の授業で、千葉市は世界に七都市の姉妹・友好都市があり、青少年の相互派遣や受け入れ、小・中学校などの交流が行われている。

千葉市の姉妹・友好都市(7都市)



千葉市国際交流協会ホームページより

ることを学んだ。そういえば、習い事が一緒の友達の学校の、千葉市の姉妹・友好都市からの留学生が来ていると聞いたことがある。日本の伝統文化の雰囲気や留学生に味わってもらおうと、文化体験プログラムが開かれたという。琴を演奏したり着物を着用したりして日本文化に触れたという話だった。日本が世界に誇れる文化や伝統があるということやうれしくも思ったし、それぞれの国のよさを知り合うのは素晴らしいことだと思った。

ある日、旅行の同行を終えて帰国した叔母の顔は、いつもと違って陰しかった。「今回は、ちょっといやな出来事があったね……。あなたも、もう中学二年生かあ。そろそろ知ってもいいころよね。」

(何のことだろう……)

と、私が思っていると、叔母は深く息を吐いた後、話を続けた。

「いつも世界を旅して帰ってくると、あなたにその国の素晴らしさを伝えてきたのよね。景色だって、食べ物だって……それに、旅先で出会う素敵な人たちとのふれあいも、自分の世界を広げてくれると思うの。でもね、世界は、本当に広いのよ。日本では考えられないようなことや生活があるの。」

私は、叔母が何を話そうとしているのか、わからなかった。詳しく聞いてみると、旅の途中で、小学生くらいの女の子にバックをひったくられそうになったお客さんがいたとのことだった。その国で頻繁ひんぱんに起きているらしい。お客さんは、幸い、けがもなく、バックも無事だったが、ショックを受けたに違いない。

（そんなことが頻繁に起こるなんて、どういうこと？子どもたちは、学校に行っていないの？なぜ、そんなことをしなければならぬの？）

私の頭の中は真っ白になった。私は、夢見がちに世界の国々のいい所しか見ていなかった。私の心が動き始めた。

（世界について、まだまだ知らないことがあるのかもしれない……）

姉妹・友好都市について調べていると、私は、ある文章に出合った。それは、海外に留学した中学二年生の野口さんが千葉市の英語発表会で行ったスピーチの原稿だった。

「留学先の子どもたちから学んだこと」

ホームステイは一人だったため、意思の疎通が思うようにいかずに大変でした。しかし、ホストファミリーはとても親切で、居心地良く過ごすことができました。楽しい思い出がたくさんできたのですが、一番心に残っているのは、子どもたちの厳しい生活でした。家族紹介の時にメイドの二人の女性を紹介されました。何と彼女たちは、私と同じくらいの年齢でした。二人のメイドが私のために部屋を掃除してくれたら、食器の片づけや洗濯などを全てやってくれたりしました。私は、罪悪感のようなものが心に溜まってきました。私は、思い切って聞いてみました。「ここにいて幸せなの。」と。彼女たちは、突然の質問に一瞬驚いただけで、「家族が生きなくていくためだから仕方ないの。だけど、この家の人は皆優しい。よくしてくるか

ら幸せよ。」予期せぬ答えでした。メイドとして扱われているのに彼女たちの口から『幸せ』という言葉が出るなんて。彼女たちは現実から逃げず、おしろ楽しんでいるようでした。尊敬しなくてはなりません。

もう一つ衝撃的だったことは、車の窓から見た景色でした。ゴミの山が見え、その中で、小さな子どもたちが大勢で何かを集めていました。ホストファミリーに聞くと缶やビンを集めてお金に換えているのだそうです。私は、自分の目や耳を疑いました。その子どもたちの大部分は、家がなく、学校にも行けず、生きていくために働かなければならないのです。大勢の人が貧困や飢えに苦しんでいるのを見て、私は、何とかしたいという気持ちと、私一人ではどうすることもできない無力さに涙が止まりませんでした。

(原文から一部抜粋)

このスピーチ原稿を読んで、私は胸が重くなった。

世界には、宗教や民族、文化など、国それぞれの違いがある。また、差別や貧困などの問題もある。知りえたことだって、きっと、ほんの一部でしかない。もっと、いろいろな考え方や見方があるのだろう。

私は、ふうっと大きな息を吐いた。

☆私は、どうして胸が重くなり、ふうっと大きな息を吐いたのでしょう。

☆世界で今、起きている差別や貧困などの問題について、あなたはどのように考えますか。



「道徳教育用教材（中学校 2 学年用）・千葉市に生きる」作成委員

●学識経験者

千葉大学教育学部 特任教授 土田 雄一

●委員長

千葉市立おゆみ野南小学校長 石野 高弘

●委員

千葉市立葛城中学校 秋葉 文彦

千葉市立稲毛高等学校附属中学校 岡村 忍

千葉市立加曽利中学校 梶原 明日馨

千葉市立さつきが丘中学校 唐澤 晶子

千葉市立打瀬小学校 川島 恵子

千葉市立山王小学校 川村 陽平

千葉市立磯辺中学校 久保田 美和

千葉市立轟町中学校 齊藤 優

千葉市立大森小学校 佐藤 晃代

千葉市立本町小学校 長谷川早由里

千葉市立新宿中学校 原田 雅子

千葉市立川戸中学校 御橋 知世子

●千葉市教育委員会事務局

指導課長 山本 幸人

指導課統括指導主事 小坂 裕皇

指導課指導主事 岡田 直美

平成 27 年 3 月

編集者 千葉市教育委員会

印刷者 株式会社 プリンテクス

発行者 千葉市教育委員会

千葉市中央区問屋町 1 - 3 5